

2代真柱による「おさしづ」解説

2代真柱の教語解説

中山正善 2代真柱は、『天理時報』『みちのとも』をはじめとした天理教内の新聞雑誌に、非常に多くの書き物を残している。それらは後に書籍化され、一冊の本として読めるようになっていくものが多い。そうした2代真柱の連載の一つに「教語解説」というものがある。昭和26年（1951）、2代真柱は次のように述べて「教語解説」という構想を発表した。

此天理教用語の解説については、十数年以前から、試みたいと思つてゐた節々が、沢山あるのです。……勿論、百十年余りにわたる間に用ひられてきた言葉すべてについて、独力で解説しおほせる事は、不可能かも知れませんが、そのうちの若干から形をつけて、又同じ志を持つ人々の協力をも得て、完成の歩を進めたいのであります。教理用語、教会史上の言葉、教規、その変遷から、その時々活躍してくれた人々の名前、その信仰、布教の経路、功績などを数へ上げますとき、日暮れて道尚遠い憾はありますが、敢て筆を初めたのであります。

（『みちのとも』昭和26年1月号）

この構想のもと、「続ひとことはなし—教語解説」の連載が、『みちのとも』の昭和26年1月号から昭和29年5月号にかけて掲載された。そのなかで、「おふでさき」「教祖」「みかぐらうた」「つとめ」「ぢば」「親神」という事項が解説されている。その後、昭和31年5月から同年11月にかけて、『天理時報』上で「成人譜」という連載タイトルのもと、「こふき」に関する研究が掲載された。これらはそれぞれ、『続ひとことはなし』（道友社、1951年）『続ひとことはなしその二』（道友社、1957年）『こふきの研究』（道友社、1957年）として書籍化されている。

2代真柱による「おさしづ」の連載

「こふき」の研究の後、『天理時報』において「成人譜」の連載タイトルを引き継いで、「おさしづ」の解説が掲載された。この「おさしづ」解説は「教語解説」の一環として始められたのだが、これがそれまでのどの連載よりも長く続けられることになる。連載の数にして約500回、期間にして昭和32年から42年までの10年間。出直しによって打ち切りになるまで続いた、2代真柱の最後の連載である。これだけ長く連載された「おさしづ」解説だが、その後書籍化されることはなかった。それまでに連載されていた「教語解説」も「こふき」の研究も書籍化されているのに比べて、これだけ長く連載された「おさしづ」解説が書籍になっていないというのは、一見、意外な感じがする。しかし、この「おさしづ」解説の中身を見ると、書籍化されなかったわけはすぐに察せられる。

八巻本の「おさしづ」

今日「おさしづ」を読むとき、一般に用いられるのは、昭和38年から41年に刊行された「おさしづ改修版」であるが、2代真柱の「おさしづ」解説は、いわゆる「八巻本」と呼ばれる「おさしづ」本をもとにしている。これは昭和2年から6年にか

て、教会本部から33分冊によって編集刊行された「おさしづ」本を、兩年祭記念（教祖50年祭・立教百年祭）に全8巻にまとめられたものである。

2代真柱の「おさしづ」解説は、まず次のように八巻本を分類する。

1. 教祖様御話（3件）、2. 御さとし（13件）、3. お話（15件）、4. 制限（179件）、5. 本部事情（549件）、6. 教長及家族（109件）、7. 本席及家族（297件）、8. 一般教会事情（9,839件）、9. 個人（2,189件）

それに続いて、八巻本の目次に列記された割書（2代真柱の解説においては「題名」と表現）と、本文の割書が同じでないものがある、という問題意識から、「おさしづ」本文に出てくる割書を一字一句省略せずに、すべて書き出そうとする。とはいえ「おさしづ」の量は膨大である。丸一年間、ただ割書を列挙するだけの連載が続いた後、「とうとう資料の整理に追われて無味乾燥な一年となつて了いました。……年の明けと共に何とか考え直そうかと思つたり、辛抱して貰おうかと思つたりして、年を送ることになりました」（『天理時報』昭和32年12月22日号）と迷いを吐露しつつも、結局、その後もただひたすらに「おさしづ」の割書を書き出す連載が何年間も続く。ようやくすべての割書の列挙が終わりそうになった頃、出直しによって連載自体が終了している。

結局のところ、2代真柱による「おさしづ」解説は、10年間、八巻本の割書ほぼすべてを字句通りに書き出すことに終始した。正直なところ、筆者は最初、なぜこんなことをされたのかと意図を解しかねた。しかし、この「おさしづ」解説と並行して、「おさしづ改修版」の編集刊行が進んでいたことを考えると、その意義が少し分かる気がする。「おさしづ」の割書は、そのお言葉がどのような経緯で下されたものかを説明するものである。八巻本の割書は、基本的に「おさしづ」が下された当時、筆録した人が付けたものである。「おさしづ改修版」では割書に編集の手が入り、用語の統一がなされている。恐らくは書物としての読みやすさという観点から、そうした編集がなされたのだろう。それに対して、2代真柱による「おさしづ」解説には、当時の言葉遣いや雰囲気があるまま残る八巻本の割書を一字一句変えずに記録しておくというところに、大きな意義があるだろう。

本連載のねらい

「おさしづ」の件数として圧倒的に多いのは、「一般教会事情」の「おさしづ」である。教会という制度が天理教のなかに導入され展開していくのは、まさにこの「おさしづ」の時代であり、後々まで続く天理教の教会の形式はこの時期に作られたともいえる。「おさしづ」では、教会の設置や運営に関するさまざまなことが伺われている。したがって、「おさしづ」の「一般教会事情」の割書は、教会がどのように天理教内に定着し、制度や組織が展開していったのかを知るための重要な資料である。次回以降、本連載では、八巻本の「一般教会事情」の割書を時系列的に読み解いて、一般教会の草創期の歩みを辿ることにしたい。